



学部長のご挨拶：『若芽通信』をお届けします



埼玉大学マスコットキャラクター メリンちゃん

「大変だけど、やりがいがあります！」

埼玉大学教育学部を巣立って学校の先生になった教え子たちから聞く言葉で、これほどうれしい言葉はありません。そこには、子どもの将来のために打ち込む姿、子どもと共に成長する姿、自身の自己実現に向けて歩み続ける姿を感じ取れるからです。埼玉大学教育学部は、このような先生を育てる学部である、と私は胸を張って言うことができます。

しかし、マスコミでシャワーのように流れる学校現場のイメージはどうでしょうか。多忙でブラックな職場、様々な教育課題、教員不足……。もちろん否定はできませんが、そのイメージが学校教育全体や教師のやりがいにも

でも暗い影を落とすのであれば残念なことです。子どもたちが先生と関わりながら日々成長する、希望に満ちた本来の学校の姿がなかなか発信されないことに、もどかしさすらおぼえます。

もっと夢のある学校の姿や教師のやりがい、そのための学校現場の努力、大学の取り組みなどを知ってほしい。そのような思いで『若芽通信』を発行することにしました。学生の大学での学びや進学にも参考になる情報をお届けする予定です。本学部の受験を考えている高校生の参考にもなるでしょう。

学生が考えてくれたこの名称には、教育学部で学んだ学生が「若芽(わかめ)」となって、先生として育ててほしいという願いが込められています。埼玉大学のマスコット「メリンちゃん」も若芽が芽吹き成長していくイメージですし、若草色の埼大カラーにもぴったりの学生の可能性を表現しています。

プロの手を経ず、手作りの紙面です。そこから、私たち教育学部教員の熱意を感じとっていただければ幸いです。年2回の発行を予定しています。ご一読くださいますよう、お願いいたします。

令和6年11月
教育学部長 戸部 秀之



▲教育学部 A 棟の前で



創刊記念特集①：卒業生から在学生へのメッセージとエール

本学教育学部の小学校コース自然科学専修理科分野を卒業し、現在は小学校で教員として活躍する鈴木大成先生(さいたま市立仲町小学校教諭)からのメッセージをお届けします。教員としての日々とやりがいや魅力、学生生活を振り返って、教員採用試験の受験体験等、さまざまなエピソードを語ってくださいました。

教員の仕事、その魅力とは

現在さいたま市立仲町小学校で勤務し、5年生の担任をしています。私が感じている教職の魅力は、大きく3つあります。

1 つめに、子どもたちの成長に深く関わることができるという点です。教育実習(注1)や「学校フィールド・スタディ(注2)」の授業で子どもたちの成長を感じられた人が多いと思うのですが、実際に教員として働くと、当然、実習よりも各段に子どもたちと長く、そしてとても密に関わることになります。日々の生活の中で子どもの成長をたくさん感じられる瞬間があって、本当にやりがいのある仕事だなと感じています。

2 つめに、毎日がとても刺激的で、同じような日が1日もない点です。子どもたちはとても素直です。自分が授業準備でうまくいったこと、そして至らなかったことが、そのままダイレクトに、子どもたちから反応として返ってくる日々なんです。その分、責任が重い仕事でもあるのですが、私にとってはとても楽しく、充実していると感じられる毎日です。

3 つめに、これは教職のいい点でもあり、楽しい1年が終わる寂しさも同時

に感じるころなのですが、1年ごとにいろいろなことがリセットされる点です。ただこれについては、私の場合は初年度で4年生の担任をしていたんですが、5年生に持ち上げることが決まりました。1年目でできなかったことを生かして、2年目も頑張ろう！と思えました。

ちょっと番外編的な魅力も…

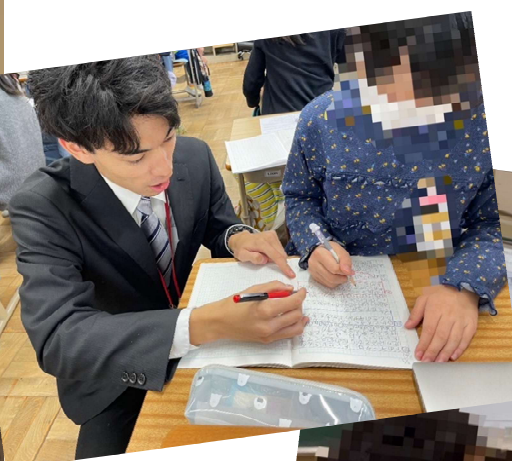
教員としてのやりがいの他に、実はうれしい魅力もいくつかあります。まずは「給食」。これは地味なようで大きな魅力だと思います。毎日栄養バランスを考えられた美味しい給食を、200円台で食べることができます。企業等で務める友人のなかには、お弁当づくりや、お昼ご飯の買い出しが面倒だと言っている人も多いので、教員の給食の制度は非常にありがたいなと感じています。

次に、夏休みの存在です。毎年40日ぐらいの夏休みがあります。普通は社会人になると、連続してまとまった休みが取りにくいですね。教員の場合、誰にも迷惑かけずに長期休暇を取れるのは魅力的だと思っています。昨年度(講話当時)は初年度で予定が組みにくかったんですけど、今年は海外とかにも行きたいなと思っています。

最後に、これは私の就職したさい



▲電子黒板を使った授業のひとつコマ



▲1人ひとりに向き合う指導



▲「はいーい！」の声が聴こえてきそう

たま市とか、比較的せまい自治体限定の話なんですけれど、異動するとしても近距離の範囲内となるので、通勤が非常に楽です。安心して住む場所を決められますね。

教員になることが不安な皆さんに

私の在学中、友人のなかには、教育実習を通じて、教員になることにに対して不安を持ったという人もいました。そこで、そんな皆さんに向けて少しお話をしたいなと思います。

まず指導案についてです。実際に教員になると、指導案は年に数本しか作りません。教育実習では、毎時間作って大変だった人もいると思うのですが、実際に働き出すと毎時毎時作成はしません。教員 1 年目が一番作成回数が多いと聞いていますが、私の場合は 8 本でした。その点は安心してください。

次に授業づくりについてです。教育実習では、1 つ 1 つの授業を作るのが精神的にも時間的にも負担になっていたという人がいると思いますが、教員として働き出してみると、だんだん効率的に作れるようになります。学年の先生が助けてくれることも多いので、心配しなくて大丈夫です！

最後に、不安に思われやすいかなというのが、プライベートの時間が取れるかということです。ずっと教育実習中は、土日とか放課後とか遊びに行く予定を入れない、入れられなかった人もいると思うんです。授業準備を終えるとどっと疲れてしまったりしたと思います。でもやはり教員として働き、それに慣れてくれば、趣味や遊びにしっかり時間を取ることもできるんですよ。

同僚の先生たちと仲良くなると、仕事終わりに飲みに行ったり、一緒に出かけたり、プライベートで楽しい時間を過ごすこともできます。メディア等で教職について何かネガティブな情報があふれていることもあって、不安になっている人もいるかなと思います。でも、それが全てだと思わずに、教職を諦めないで欲しいなと思います。



▲プライベートの時間も充実

教員採用試験を振り返って

すでに教員を目指す決めてる皆さんに、教員採用試験の体験についてもお伝えします。これもポイントは 3 つあります。

1 つめは、教職支援室の活用です。教員採用試験の勉強をするにあたって、何をしたらいいかわからず悩んでしまったり、不安になったりしたら、そんなときにはぜひ教職支援室に顔を出してみましょう。そこで会った友達に教員採用試験の情報を教えてもらったり、同じような悩みをもつ学生と話せたりして…悩みを解決できることも多いと思います。ちなみに私は、勉強に疲れてしまったときは、松下先生(注 3)の部屋によく遊びに行っていました。今おられる廣瀬先生、河野先生(注 4)たちもきっとあたたかくお話をしてくださるはずなので、お部屋を訪ねることもおすすめです。お仕事の邪魔にならないようにだけ気をつけてください(笑)。



▲大学卒業時の鈴木先生

2 つめに、大学推薦枠を活用することです。多くの自治体の推薦枠が埼玉大学にはあります。推薦で受験すると 1 次試験が免除になるなど、アドバンテージを受けることができます。さいたま市では 1 次試験が免除になるので、面接や小論文の対策に集中することができます(注 5)。大学推薦で受験した人の合格率は一般よりも高くなっているはずなので、情報をチェックしてみるようにしましょう。

3 つめに、多くの人と練習をするということです。埼玉大学には教員採用試験を受ける友達がたくさんいると思います。クラス別のセミナーなどでの出会いを大切に、様々な人と練習をしましょう。他の人の面接を見るだけでも、引き出しを増やすことができると思います。

教員 1 年生！初任者として大切にしたこと

将来教員になる皆さんに、私が初任者としての 1 年間に心

がけたことについてお話しします。

1 つめに、謙虚に学ぶこと。教員は授業の他に、学級経営や校務分掌という学校運営の仕事も任されるのですが、初めてのなので当然何もわかりません。先輩の先生方は、聞けば親切に教えてくれます。わからないことは何でもすぐに聞き、報告・連絡・相談も怠らないようにしました。

先生方の授業を見て、その後にご指導いただく機会があったり、学級経営についても助言を頂けたりします。まずは言われたことを実践するように心がけていましたね。

2 つめに、感謝の気持ち。教員は、1 人では成り立たない仕事だと思います。同僚の先生、子どもたち、保護者の方々が見守って支えてくださるからこそ自分がいることを忘れず、そういう気持ちを大切にしてきました。

3 つめは心身の健康。私自身は人間関係に恵まれて楽しい初年度を送りましたが、その中でももちろん、行事等で多忙な時期もあります。そこで無理をすると教育活動に支障が出てしまうので、勤務時間以外のプライベートの時間も大切にして充実させることで、健康を保つようにしました。

在学生の皆さんにエール

参考になったでしょうか？将来教壇に立っている自分を想像して、どんな教師になりたいか考えてみてください。また、悩める人もゆっくり焦らず進路を決めてほしいなっています。教員を志す皆さん、いつか一緒に働ける日を楽しみにしています！

注)

1. 科目名は「応用実習Ⅰ」「応用実習Ⅱ」。
2. 本学の「教職キャリア科目」の 1 つ。教員が行う教育活動の一端を、実際に学校で体験的に学ぶことを通して、教員としての子どもへの支援の方法などを身につけることができる。
3. 鈴木先生の在学時に教育実践総合センターに在籍していた教員。
4. 現在同センター教員。
5. 自治体により、また年度により、大学推薦の被推薦者となった場合に免除となる試験や条件が異なる。

※この記事は、2024 年 4 月 4 日に、附属教育実践総合センターにより企画・開催された「教職支援セミナー 一斉指導」における講話を、教育学部教員の森 薫が再構成したものです。

◆◇教職支援室のご紹介◇◆

鈴木大成先生のお話にも登場した「教職支援室」についてご紹介します。埼玉大学教育学部には、平成 27(2015)年度に「教員養成推進室」が立ち上げられました。これは、教員を目指す皆さんを支援するためのもので、多角的な視点から皆さんの教職への道を支える事業を展開してきました。その直接の窓口として、教育学部の C 棟 2 階に開設しているのが「教職支援室」です。なお、令和 2(2020)年 4 月から、「教員養成推進室」は、窓口である教職支援室と名称を合わせるため、「教職支援委員会」と改称しています。

教職支援室では、教員採用試験を突破するための様々なセミナーの企画・運営、全国の教員採用試験の情報収集と提供、教職支援室スタッフによる相談などを行っています。教職支援室の活動は、担当講師やアドバイザーの先生方、さらに教職支援室スタッフが協同することで実施されています。それぞれのニーズに沿った支援がなされていますので、教職支援室を、『教員を志す学生のラウンジ』として気軽に活用してください。

《開室時間》

月曜日から金曜日 8:30-17:00

※臨時で閉室することもあります。支援室前の掲示で確認してください。

《教職支援室ホームページ》

<https://park.saitama-u.ac.jp/~shinro/>

※「埼玉大学 教職支援室」で検索してもアクセスできます。



埼玉大学マスコットキャラクター メリンちゃん



教育学部1年生全員は、入学早々6つのクラスに分けられ「教職入門Ⅰ」という授業を履修します。私もその担当教員の一人です。「教職入門Ⅰ」は、教員免許状を授与されるために単位修得が必要な「教育の基礎的理解に関する科目」の一つで、「教職の意義及び教員の役割・職務内容」を扱う授業です。

学生が教員を志望するためには、教員の仕事の内容を知り、教職の意義や教員の役割を自ら感得し、さらに教職の意義を踏まえた上でやりがいを感じ取る必要があります。学生の中には、教員養成学部として、無理に教員にしようとしているのではないかという警戒感もあります。しかし、教職は他の職業と同様に、誰にでもできるものではなく、適性と相当の覚悟が必要なものです。適性と覚悟がないまま無理に教員になっても、自分が傷つくだけでなく、かかわりのある子どもたちも不幸です。



そこで、この授業では、「教職の意義や教員の役割」について「べき論」を展開するのではなく、教員の一日や仕事の流れ、今日の学校を取り巻く課題を題材として扱いながら、学生が「教職の意義や教員の役割」を自覚することを重視しています。

さらに、自覚＝自己評価を授業の中心に据えるために、自己評価能力、言い換えると「メタ認知」の能力を育成する評価論・教育論である「一枚ポートフォリオ評価(OPPA)論」を導入しています。授業を貫く「本質的な問い」を「教師とは何か」とし、毎回の授業で「一番大切と考えたこと」「感想・疑問」からなる学習履歴を記録しこれらを自己評価しながら「教職の意義や教員の役割」を自覚していくのです。

「教師とは、子どもたちが新しい知識や考え方、感性などたくさんのことを見つけ手に入れていく、そのサポートをする存在である。それは”教える”という一方的な作業というよりも、子どもたちの見ている世界を想像しながら、子どもたちと一緒に学び、成長していくと言った方がいいかもしれない。」これは、ある学生の自己評価の一部ですが、このように、「教職の意義や教員の役割」を自覚しています。

まさに、「後生畏るべし」です。



埼玉大学マスコットキャラクター メリンちゃん

本学教育学部では、入学後すぐ、4年間を通じた教員養成のカリキュラムが始まります。本学教育学部の卒業生でもあり、県内公立中学校教諭、教育学部附属中学校教諭、副校長、さいたま市教育委員会事務局職員、さいたま市公立小学校校長を歴任され、現在附属教育実践総合センター教授を務める石田耕一先生に、ご担当科目「教職入門Ⅰ」におけるご自身の教員養成について、また、学生の学びの姿について、文章を寄せていただきました。



創刊記念特集②： 理論と実践を往還！教職大学院生の日々

埼玉大学を卒業し、さらに専門性を深めるために教職大学院で学ぶ院生 2 名に、入学の経緯から教育実習、大学院進学、現在取り組んでいる研究とこれからの展望について語ってもらいました。進路について考えている在学生の皆さんの参考になるはずです。

◆語り手

高崎菜摘(教職大学院教職実践専攻総合教育高度化プログラム学校構想サブプログラム 1 年)

逸見友花(同専攻教科教育高度化プログラム芸術系教育サブプログラム(音楽)1 年)

◆聞き手・構成

森 薫(教育学部芸術講座音楽分野准教授)

教育学部での 4 年間、教育実習の思い出

———埼玉大学教育学部への入学の経緯は？

逸見:小学生のころから教師になりたいと思っていて、埼玉で教員になるなら埼玉大がいいんじゃないか、という親の勧めもあり、中学 3 年生のときには埼玉大を志望していました。高校も逆算で、埼玉大学に入れそうな高校を選びました。ちょっと特殊かもしれませんが(笑)。小学校の先生になりたかったので、教科は迷いましたね。吹奏楽で音楽をずっと続けてきたので、もっと知りたいなという思いから音楽分野を受験し、入学しました。

高崎:私の場合も教師になることはずっと前からの夢で、地

元は茨城なのですが、埼玉大には心理教育実践学の講座があると知って。心理の側面から教育について学べる自分が自分には魅力的で、推薦入試で入学しました。親を説得してオープンキャンパスにも来ましたね。

———入学してから教育学部で学んだことで、印象に残っていることはなんですか？

高崎:2 年生のときに、授業で心理学の研究方法について学んで、アンケート実施や分析に取り組んだことですね。これがすごく楽しくて！人格形成等についても様々な尺度を知って、興味を深めていきました。これが教職大学院に進学した理由の 1 つにもなるんですが。心理学が面白いな



▲教育学部時代からの部活の友人でもある 2 人。和やかな雰囲気の中インタビューがおこなわれました (写真: 橋本廉士)

って気づいて、のめり込んでいった感じです。

逸見: 私の場合は、個別の授業というよりも、教育学部の授業全般で、思い描いている教師像や、自分の考える教科指導の在りかたについて話し合う機会がすごく多かったんですね。色々な授業で対話や発表を重ねるなかで、元々は「恩師みたいになりたいな」という漠然としたイメージだったものが、明確なビジョンになっていき、知識も深めていったという…すごく得るものが多かったです。あとはやっぱり教育実習ですね。



教育実習を振り返る高崎さん▲

———教育実習は、とくに未経験の1、2年生にとっては不安が大きいと思います。どんな経験をしたか教えてください。

高崎: はい、私ももう行く前は不安しなくて。人見知りだし授業もしたことないし。でも、初日に6年生の教室に入っすぐ、子どもたちがたくさん集まって来てくれて、それがすごく嬉しくて。授業も、子どもたちとの関係性ができていくにつれて、子どもたちの方から助けてくれました。挙手が増えて、こちらも机間指導しながら「これすごくいいから発表してくれない？」って声かけたりして。普段発表しない子が手を挙げてくれると嬉しくて…と、そうやって達成感を徐々に味わっていきました。

あと印象的だったのは、実習の最終日翌日にあった運動会に行った時のこと。練習の成果を発揮する姿に感動していたら、退場する子どもたちの1人と目が合ったんですが、私にちいさくガッツポーズをして帰っていったんです。その手の動き一つから、その子のここまでの頑張りや充実感が伝わってきて、教師ってなんてやりがいのある仕事なんだ、子どもたちを1年通してずっと見ていたいという思いが生まれました。

逸見: 先生との関わりで学んだこともとても多かったです。指導教員の先生が一つひとつにねらいを明確に持たれている方で、例えば、どうして教室に教壇が無いのかを、学習のユニバーサル・デザインの観点から教えてくださったりしたんですね。先生は子どもたちとなんとなく関わっているのではなくて、信念を

もって日々取り組まれているんだと知りました。また実習先では職員室に私の机を用意してくださったので、先生方が子どもたちの良いところ、頑張ったことを話し合っ盛りがあって…学校って、子どもという存在を中心に先生方が連携して、みんなで子どもたちを成長させることを目標に取り組んでいるんだ、私もその一員になりたいって強く思っただんです。

教員採用試験に合格！

さらに学びを深めに教職大学院へ

———なるほど。そうやって教員志望が高まって、教員採用試験を受験したんですね。2人とも合格された状態で、猶予制度の適用を受け、大学院に進学していますよね。

高崎: 教育学部で心理学がすごく面白いって気づいて、でも金銭的なこともあるし、当初は教員になって5年経ったら行こうって思っていました。でもゼミの堀田先生のもので引き続き学びたい気持ちがあつて。それと逸見さんや他の友達が進学すると覚悟を決めていたので、影響されたところもあります(笑)。

逸見: 私は完全に森先生のおかげなんですけど、音楽科教育ゼミに入って、本当に毎週のゼミが楽しかったんです。わからないことだらけの中、どうやって授業を作るのかとか、理論的なこともたくさん教えて頂くうちに、「大学4年間では学びきれなかった」「もっと学びたい」という気持ちが強くなりました。コロナ禍でできなかった大学生らしい生活を取り戻したい気持ちもありました。



院進学の経緯を語る逸見さん▲

高崎: 入学した後、奨学金の返済免除があると分かったのは嬉しかったです。

逸見: うん、学部生のなかには迷っている人もいないけど、そういう制度もあるから「行かない手はないよ」っ

て思いますね。

大学院で取り組んでいる研究とこれからの展望

———今はどんな研究をしていますか？

高崎：私は、教師がつくる学級風土が子どもたちにどんな影響を及ぼすのかというテーマで研究を進めています。学部的时候は子ども同士の関係に着目していましたが、大学院に入って、教師と子どもの関係に焦点をあてるようになりました。関連研究を調べると、例えば「自己肯定感」という言葉の定義だけで、本当に多様です。そういうところからもう、面白さと難しさを感じています。明確な答えがない問いに取り組むからこそ、考察の幅が広がっていく、そんなところも奥が深いと思います。

インタビュー調査で先生方からお話を伺っていますが、それが、私自身が教員になった時に生きるだろうとも思います。実地研究先での、先生方の子どもへの声掛けなどもすごく勉強になっていて、私の目指す「あたたかい学級づくり」に繋がたいと思いますね。

逸見：私は保幼小連携・接続という視点から、音楽科におけるわらべうたの教材化について研究しています。実地研究でも小学校1年生のクラスに入らせて頂き、保育所や幼稚園から入学してきた子どもたちが小学校の一員となっていくその過程を見えています。音楽の授業でわらべうたを扱った活動もさせて頂きました。わらべうたで子どもたちがぱっと明るくなる瞬間を、授業者として目の当たりにして、わらべうたの魅力を実感しています。

一方で、わらべうたの歴史や理論についても課題研究を進めています。「教科書研究センター」の教科書研究論文助成に採択

頂いたので、文献調査にも取り組むところです。学校教育の現場を意識しながら、理論や歴史を研究できるのは教職大学院の強みかなって思いますね。それが将来的には、子どもたちが学校って楽しいなって思える授業づくりや学級づくりにつながればと。

それから研究以外にも、教職大学院の授業では現職教員の先生方(注：教職大学院には、現役の小・中・高等学校の教員が在籍して学ぶための長期研修制度がある)とお話ができるので、そこからもいろんなことを学んでいます。

高崎：確かに、貴重な経験をお聞きできるのは大きいです。———素敵なお話をありがとうございました。最後に、将来はどんな教員になりたいですか？

逸見：私は、教員としてキャリアを積んでいきたいというのはもちろんなんですが、一方で、家庭を持って子どもを産み育てたいという思いも強くて。教員が自分自身の生活も充実させて、健康に、明るく、そして人間性も磨いていくことが、学校の子どもたちにとっても良いことだと思うので、両立しながら成長していきたいです。

高崎：私もワークライフバランスっていうのは意識していますね。それから、自分に正直に、ありのままで教員をやりたいって思います。楽しい気持ち、つらい気持ち、どちらも子どもたちに伝えながら、「児童を教え導く」というより、「児童と支えあいつつ成長する」教員になりたいです。もちろん職員室の先生方や、自分の家族とも支えあいながら、人生を送りたいなって思いますね。(終)

◆◇編集後記◇◆

教育学部芸術講座音楽分野教員の森 薫です。埼玉大学教育学部のニュースレター『若芽通信』をお届けすることになりました。創刊号では、本学を卒業し生き生きと働く若手の先生や、学校教育実践の経験豊かな本学教員、そして教職大学院で学ぶ院生へのインタビュー等を掲載しています。楽しんで頂ければ幸いです。読者アンケートのフォームもご用意しましたので(下記に掲載)、ご感想、ご意見もお寄せください。

さて、インタビュアーという立場で院生の話を聴くことになり、彼らが感じてきたこと、考えていること、これからの展望等に改めて触れることができ、驚いたり感動したりと、嬉しい時間を過ごしました。一人ひとりの学生にそれぞれの思いがある(考えてみれば当然なのですが…)ことを忘れず、これからもよりよい教育、研究、教員養成に取り組みたいと思います。

◆◇『若芽通信』に声をお寄せください◇◆

ご感想や、今後取り上げてほしいトピックなど、ございましたらこちらまでお送りください。

URL:<https://forms.gle/hq4iGQgVacbyzTZJ9>



埼玉大学教育学部情報誌『若芽通信』Vol.1

2024年11月発行

編集・発行／埼玉大学教育学部運営企画室

〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255